

干ばつで枯れてしまった小麦。灌漑用
水路が完成すればそうした問題も解
決するだろう

灌漑用水路の建設現場を視察する
中村さん(中央)と村上さん(左)



特集
◎薬物問題

断ち切る勇気を
持とう

アフガニスタン
from AFGHANISTAN

枯れた大地に 再び緑を

タリバン政権崩壊後、貧困と干ばつの
中で生き延びるためにケシ栽培を選ん
だアフガニスタンの人々。NGOのペシ
ヤワール会では、枯れた大地に水を引
き、小麦などほかの作物栽培を可能に
することで、ケシの減少を願っている。



復活したケシ栽培

「国境を越えようと、花畑が一
面に広がっていました」

2002年4月、パキスタンか
らカイバル峠を越えてアフガニス
タンに入ったペシャワール会の福
元満治さんを迎えたのは、荒廃し
た大地を鮮やかな赤やピンクに
染めるケシの花だった。

アフガニスタンでは特に北部と
東部でケシ栽培が盛んだが、タリ
バン政権が撲滅に努めた結果、同
国のアヘン・ヘロインの生産量は
大きく減少した。しかし、01年の
「9・11」後、タリバン政権の崩壊
と同時にケシが復活。福元さん
は「ケシの作付けは11月ですか
ら、政権崩壊を受けて人々は一
斉にケシを植えたのでしょう」と
言う。現在、同国のアヘン生産量
は世界一。そしてそのアヘンから

生産されたヘロイン
のほとんどが欧米
(主にヨーロッパ)
で消費されて
いる。

ケシ栽培が拡大し
たもう一つの要因は、20
00年に始まった大干ばつだ。
「金がなくても食べていける
が、雪がなくては生きていけな
い」ということわざがあるよう
に、農業国アフガニスタンでは、ヒ
マラヤにつながるヒンズークッシ
ユ山脈の雪解け水が乾燥した大
地を緑に変える。しかし、数十年
に1度、干ばつが発生する上、地
球温暖化の影響で例年より降雪
量が少なかったことが水不足に拍
車をかけた。多くの人が砂漠と
化した土地を捨て難民にならざ
るを得なかった。そんな中、少量
の水で栽培でき、しかも換金性

が高いケシ
は、干ばつと貧
困にあえぐ人々に
とっては「救世主」と
もいえよう。

1984年にパキスタン・ペシヤ
ワールで活動を開始した中村哲
医師率いるペシャワール会が、ア
フガニスタンでは東部を中心に医
療・農業・水源確保事業を展開し
ている。無医村で診療活動を行っ
ていた中村さんらが水源確保事
業に乗り出したのは、干ばつの惨

医者よりも清潔な水を



立派に育ったサ
ツマイモ。現地
の人々は揚げて
食すが、味は好
評だ

昨年植えたお茶は30センチほどに成長している。ケシに代わる作物の一つとして何とか根付かせようと、試行錯誤が続く



用水路の建設は現地の人々にとって貴重な現金収入源だ



アヘンを収穫した後のケシの実。中には種が入っている。人々は、ケシの葉の部分を野菜のように食べ、種を使ってお菓子を作る。収穫後の茎の部分は燃料に、実は子どもたちのおもちゃになるなど、用途は広い

状を目の当たりにし、何よりも水の必要性を痛切に感じたからだ。

「中村は『1000人の医者が来るよりも、100本の井戸を掘ったほうがいい』と言います。それはつまり、水不足のために泥水など不衛生な水を飲まざるを得ず、栄養失調により抵抗力が弱まっている子どもは下痢症で死んでしまう。いくら薬や抗生物質を与えても、水が汚れているままでは意味がないんです」(福元さん)

また、国民の8割を占める農民は自給自足で生活しており、十分な水さえあれば農業ができ、飢餓に苦しむこともない。ペシャワール会では、これまでに井戸1000本、38のカレーズ(伝統的な地下水路)を復旧し、さらにダラエヌールで全長14キロに及ぶ灌漑用水路の建設を進めている。これが完成すれば、灌漑面積は20

00ヘクタール、20万人の食料生産が可能となる。

「実は、帰還した難民が、私たちのまねをして灌漑用水路を作り、その水でケシを栽培するということも起こっているんです。しかし、私たちが村人とともに作っている用水路の水は絶対にケシ栽培に使わないことを、村のジルガ(長老会議)で決定しました。また、ペシャワール会の診療所があるダラエヌールでは、村人が私たちに気を使って少なくとも診療所から見える範囲ではケシを栽培していません」

しかも、ペシャワール会では井戸や用水路の建設に10000人もの村人を雇用している。この現金収入で家族を養うことができる。つまり、ペシャワール会の活動が、ケシ栽培の抑止力になっているといえる。

鹿兒島茶を現地へ

さらに、ダラエヌールの試験農場では、ケシに代わる換金作物として、お茶やサツマイモの栽培を試みている。

アフガニスタンの人々は日に何杯もお茶(日本でいう緑茶)を飲む。しかし、気候や土壌がお茶栽培に不向きなため、インドや中国から輸入している。ペシャワール会では、パキスタンから苗を仕入れ、土壌を改良して試作している。また昨年、鹿兒島県の農協に

協力を呼びかけ、県内の茶園で拾い集められた茶の実55キロが現地に運ばれ植えられた。4月に現地を訪れた事務局長の村上優さんは「四苦八苦しているようですが、30センチぐらいにまで成長していました。しかし、土壌改良には費用がかかるので、普及していくにはもっと工夫が必要です」と課題を述べる。

一方、順調に育っているサツマイモは人々の嗜好にも合い、つるを分けてもらって自分の畑で栽培する農民も増えているという。

「やはり背後に貧困の問題があるので、私たちもケシ栽培をやめろとは言えません。しかし、彼らもケシ栽培がいいことだとは思っていない。農業ができる環境が整い、暮らしが改善していけば、ケシから離れていくと思います」と福元さんは期待している。

貧困や干ばつが絡むアフガニスタンのケシ栽培の撲滅は決して容易ではないが、長期的な視野を持つペシャワール会の地道な取り組みこそ、最も近道なのかもしれない。

【ペシャワール会】

〒810-0041 福岡市中央区大名1-10-25 上村第2ビル 307号
TEL : 092-731-2372 FAX : 092-731-2373
Email : peshawar@mx.mesh.ne.jp
URL : <http://www.1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>